



小笠原家文書 長崎奉行所与力小笠原貢蔵とその養子で
浦賀奉行所与力・神奈川奉行所支配調役をつとめた小
笠原甫三郎の記録。

開港 の ひろば

YOKOHAMA ARCHIVES
OF HISTORY NEWS

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中央区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行日/平成4年4月29日
印刷/株中川印刷
横浜市広報印刷物登録第040006号 類別・分類C-BE160

「幕末の外交と遠国奉行展」によせて 神奈川奉行所関係資料について

今回の展示では、幕末の遠国

奉行所を題材に、日本が鎖国から開港へむけ、どのような歴史を歩んだのかを紹介した。また、長崎・神奈川・箱館などの開港場に置かれた遠国奉行所が、外交交渉や各国領事との折衝に奔走していたことも紹介した。これらの奉行所は幕府の出先機関として日本の外交に大きな足跡を残し、幕府の対外政策の尖兵としての役割を果たしていた。

ところで、横浜にも安政六年(一八五九)の開港と同時に神奈川奉行所が置かれ、この奉行所が外交事務と開港場周辺地域の取締りにあたっていた。当初奉行所のトップである神奈川奉行は外国奉行の兼務であったが、万延元年(一八六〇)からは専任の奉行が置かれ、この時期以降、奉行に就任した幕臣は二十二名の多きに達している。

また、奉行並以下の役人についても、神奈川奉行並をつとめた者が五名、支配組頭十四名、支配定番役取締り四名、支配調役二十一名と支配調役以上だけで四十名を超え、奉行所全体ではのべ数百名の人々がいたもの

と思われる。

しかし、彼らが記した諸記録・古文書の多くは失われ、現在ではほとんど遺っていない。そこで、ここでは市内の各機関が所蔵する神奈川奉行所関係資料について紹介してみたい。

まず、奉行クラスの資料としては、神奈川県立金沢文庫が所蔵する「依田家文書」がある。この文書は戊辰戦争時に神奈川奉行並をつとめ、新政府に奉行所を引き渡した依田盛克が所蔵していたもので、昭和八年(一九三三)に依田家の御子孫から金沢文庫に寄贈された。その後、金沢文庫から史料集(『金沢文庫古文書』第十七編)が刊行され、利用が可能である。

次に奉行所役人の文書としては、文久元年(一八六一)に支配調役に就任した「小笠原甫三郎関係文書」約千点がある。この文書は、小笠原家に伝えられたもので、横浜市史編集室が収集し、昭和五十六年(一九八二)当館に移管された。

この文書には小笠原が浦賀奉行所につとめていた時の記録や長崎奉行所与力であった父親の

記録も含まれており、幕末期の遠国奉行所を知るための貴重な資料群となっている。なお、この文書については、当館の紀要『横浜開港資料館紀要』十号)に目録を収録し、八月には閲覧室で公開する予定である。

このほか、当館には支配組頭星野金吾や書役齋藤録郎などの文書があるが、点数はそれほど多くない。これらの文書は現在整理中であり非公開となっているが、整理の出来たものから順次公開することになっている。

また、神奈川奉行所の支配を受けた町や村には、奉行所からの触書や廻状の写し、奉行所が町村の役人に作成させた文書などが遺っている。

主なものとしては、神奈川県立文化資料館が所蔵する「神奈川本陣石井家文書」や当館が所蔵する「関口家文書」があり、幕末期の「御用留」などから奉行所がどのように村々を支配していたのかを知ることができる。これらの文書については、既に各機関で公開しており、利用が可能である。

現在、以上の資料の所在が確認されているが、当館では今後神奈川奉行所関係の資料の発掘に努めていきたいと考えており、読者の方々の情報を期待している。

座談

幕末の外交と遠国奉行

—海防掛から外国奉行へ—

四月二十九日からの横浜開港資料館の企画展示『幕末の外交と遠国奉行』展にちなみ、江戸時代後期から幕末にかけての幕府の海防政策と外交についての研究をされているお二人をお招きし、お話しをしていただきました。東京都多摩市の市史編さん室に勤務されている針谷武志さんは主として、開国以前の海防政策の研究をされています。また、上白石実さんは、立教大学博士課程に在籍され、開港後の外交政策を中心に研究されています。

—まず最初に針谷さんから海防掛とは、どういう仕事をした人なのか、いつごろ設置されたのかといったことから、お話ください。

針谷 海防掛というのは、寛政四年(二七九)ロシア船の来航に対処するため、老中松平定信が「海辺御備御用懸」という名称の役についたのが、最初とされています。つぎに、天保一年(一八四〇)に清国での阿片戦争の情報が伝えられると、土井利位と真田幸貫の二人の老中が海防掛に任ぜられたとされています。その後、弘化二年(一八四五)七月に阿部正弘と牧野忠雅の二人の老中が海防掛になります。同時に若年寄二名も海防掛に任せ

られ、以来海防掛は常置の掛になりました。これにはさらに大目付や、目付、勘定奉行・勘定吟味役のうちの学識、才能のある者が選抜され、任ぜられます。これが諸有司の海防掛と言われるものです。従来の研究ではこの諸有司の海防掛に対する関心が高くて、先の二つについては具体的な任務・内容の研究は進んでなく、漠然と外交関係の処理する掛ととらえられていました。

—弘化の時と、それ以前は設置の目的などで違いがあるのでしょうか。

針谷 幕府の外交問題あるいは、海防問題への対処の仕方の違いが表れているのだと思います。天保期までは外国船が現われた際、老中が大名に命じて兵を派遣し、警備にあたる形が一般的でした。そのため、この時期の海防掛は老中だけの任命に限定されていました。つまり、大名を統率する老中がいれば良かった。ところが、弘化になるとそうはいかなくなると、大量設定が行われたのです。

—では、なぜ弘化に突然、大量の海防掛の任命が行われたのですか。

針谷 いえ、弘化以前にも海防掛とは呼ばれてはいませんが、海防を担当する人々がいたと考えています。実務が先あって、それを論議すべき海防の

問題というものが当然あったわけで、そういった掛というものが個別に設定されていて、それが弘化の大量生産につながっていったわけです。

—例えば、どういう掛が設けられていたのですか。

針谷 文政八年(一八二五)に異国船打払合が出されますが、その後、幕府は異国船を打ち払うシステムを作っていきます。具体的には、各地に点在している幕領の海岸に異国船が来たとき、周辺の藩はただちに応援に行かなければいけないというシステムがつくりあげられていきました。

—実際にどういふ藩が駆けつけることになっていったのですか。



針谷武志氏

針谷 例えば陸奥の小名浜へは、会津藩とか白河藩、棚倉藩などが応援に行きます。越前の本保陣屋へは、越前松平藩と鯖江藩が応援に行くと言ったぐあいです。文政期にシステムがつくられていきますが、幕領ですから勘定(奉行)所の中にも異国船対応の掛が必要になり、「浦々掛」というものが設定されます。浦々掛は奉行、組頭だけでなく実際に実務にあたる末端の役人まで任命されます。

—浦々掛にどのような人が任命されたのですか。

針谷 浦々掛は、文政七、八年に設定されますが、天保、弘化とずっと続いていきます。勘定所の人名録のような本で「会計便覧」というものがあり、天保十年とか弘化三年のものが残されていて、勘定奉行以下浦々御備場御用取扱という形で人名が記されています。

—文政以降もずっと浦々掛と呼ばれるのですか。

針谷 もちろん、弘化にも引き続いてあります。

—そうすると、浦々掛と新たに設定された海防掛の関係はどうなるのですか。

針谷 奉行については、重なっていますが、浦々掛はあくまでも各地に点在する幕領の海防問題を扱う実務処理の掛であって、それに対し海防掛は幕政全体に関連するような問題の諮問を受ける機関として設定されたのだと思います。これが弘化の海防掛の設定の意味にもつながるのだと思います。

—つまり、大きな政策決定を海防掛がやって、異国船が来た時には浦々掛が対応するということですか。

針谷 幕領についてはそういうことです。その他の遠国奉行がいる新潟、羽田、下田などは、それを通じて勘定所と具体的な処理についての打合せが行われるということです。

—横浜周辺などでは、浦々掛ではなく、浦賀奉行が担任するということがありますね。対岸の房総はどうですか。

針谷 江戸近郊である房総には、浦々掛のほか、勘定奉行が房総御備場御掛に任ぜられています。「浦々」というのは「全国津々浦々」であって、江戸に近いところは、御備場掛が所轄するのだと思います。

浦々掛と全国各地の幕領を支配する代官との関係は、どのようなものでしょうか。

針谷 浦々掛のトップは、勘定奉行が兼任します。浦々掛は奉行から組頭、さらにその下のクラスまで全部入っていて、一つの機構になっています。海岸警備は、周辺の大名を動かすのですから、代官と大名の交渉では、ラチがあかない場合が多く、大名から浦々掛に伺いか届けとか調整事項を言ってきます。「兵糧を用意して欲しい」などといった形です。

では、黒船が現われたときに、大名に対して「直ちに駆けつけよ」ということが代官クラスではできなかったのですか。遠国奉行の場合、新潟奉行が越後村松氏に対し、出兵を命じたことがありましたか。

針谷 代官でもそうしたことをできるように、前もって処置をしておくことが浦々掛の任務なのです。

軍事的な指揮命令も、代官ができるのですか。

針谷 それも浦々掛がちゃんと調整しておくのです。代官は、持ち場の指示をするだけで、具体的な指揮統率は藩がやることになっています。

海防掛には、大目付も任命されま

すね。

針谷 ええ、しかし大目付の場合は、実務する掛を持たされたとは考えていません。大目付の職分の中には、元来軍事的な側面があり、江戸湾の巡見や長崎への派遣は、ずっと以前から行われていました。ところが、弘化の海防掛設定の時に大目付からも任命されますが、大目付というのは元来全部兼帯職であって、それぞれ担任する掛を持っています。道中奉行、宗門改、鉄砲改、分限帳改などの兼帯職があり、日記改ができた時に四人から五人に増員されています。大目付の定員は、兼帯すべき職が増えるのと増員されるというのが通例になっていたので、海防掛が設定された時に、海防掛兼帯大目付という形で増員されても良かったのにも関わらず、増員されていません。海防掛が他の兼帯職と性格を異にしていたといえます。これは、海防掛が実務を担当する掛でなく諮問される掛であると考えると、納得がいきますね。

そうしますと、海防掛になることによってその問題についての政策決定権を握ることになるのでしょうか。

針谷 いえ、審議していいというか、関与できる権限だと思っています。逆の見方をすれば、協議をしいい人たちの枠を決めてしまった面もあります。海防問題に関して、皆がわいわい言うのと統制がとれなくなってきましたから。いわば協議委員を作ったようなものですね。

なぜ、この時期にそういった諮問

機関を作らなければならなかったのでしょうか。

針谷 江戸幕府の体制としては、老中が政治を行っていくのですが、老中の諮問を受ける奥右筆という職務のものがいました。例えば、今度お手伝い諸請をどの大名に命ずればよいかということを諮問されると、奥右筆は今までの実績をちゃんと調査して、回答をします。これが一般的な幕府政治の動き方でした。しかし、奥右筆制度もだんだん硬直化してくるので、天保の改革にあたった水野忠邦は、奥右筆を入れ替えたり、罷免したりして、てこ入れを行いました。ところが、水野が失脚したあと政権に着いた土井利位は、全部奥右筆任せにしてしまったのですが、江戸城が消失した時に、お手伝い御用形式での復旧を図ろうとしたところ、大名、旗本の猛反発を食いつちもさっちも行かなくなりました。そこで、土井はすべてを奥右筆の責任にして、罷免してしまいました。結局は、土井自身が退陣せざるを得なくなったのですが、つまり、諮問機関としての奥右筆は、海防のような重大な問題には対処仕切れなくなっていました。

つまり、黒船来航の急増により、時代が変わったということですね。

針谷 新しい諮問機関が必要になったということですね。もう一つは、前に言ったように外交問題や鎖国問題に保守派あるいは、強硬派と言われる人たちが様々な意見を言い始め、統制がとれなくなってきたので、協議をしい

人たちの枠を決めてしまおうとしたこともあります。

上白石 強硬な意見を言う人には、町奉行の鳥居耀蔵などがいました。鳥居は、町奉行在任中に強硬意見を述べ、罷免されますが、さらに繰返し阿部正弘に上書をし不興を買ひ、丸亀に幽閉されてしまいます。丸亀幽閉は一般には、高島秋帆事件の不正裁判が原因とされていますが、鳥居耀蔵自身は、海防問題の強硬意見がその原因と分析されています。鳥居のケースは、ほんの一例ですが、海防政策はどういうやり方をしても、どこからか文句が出てきます。いろいろな分野の諸子百説といった形で議論が沸騰しすぎると、いっこうに政策が前に進まなくなるので、専門に協議すべき部局をつくるという言葉合いもあつたでしょう。

オランダ使節の開国勧告を携えてきたバレンバン号の来航も、新たな諮問機関設定に影響があつたのではないですか。

針谷 先ほどの鳥居の件は、バレンバン号の開国勧告に関することだと言いますから、一つの契機にはなったことは、間違い無いでしょうね。

弘化二年に任命された人にはどのような人がいましたか。

針谷 老中では、阿部正弘、牧野忠雅、若年寄では、大岡忠固、本多忠徳、大目付で深谷遠江守と言ったところですね。「通航一覽」という史料でわかります。もう一つ気になるのは、ペリー来航のときに応接にあつたのは、林大

学頭(復齋)でした。それまでの日本の外交というのは、朝鮮通信使とか琉球通信使との儀礼的文書の授受であって、その点から言えばペリー来航のときにも諮問されるのは、林家が主宰する昌平齋であっても良かったのではないですか。

針谷 そのとおりですね。

——しかし海岸警備という点では、海防掛が藩に命令することになっていますね。そうすると昌平齋と海防掛とがどのような関係にあったのか、疑問が出てきます。

針谷 おっしゃるとおりペリーが来た時に中心となったのは、儒学者である林大学頭でした。それまでの東アジアの外交問題については、近世初期から、僧侶あるいは儒学者、漢学者が行うと言ったスタイルがあって、それが幕末の林大学頭が主管するということにながっています。一方、海防というのは「海岸防衛」の略で、鎖国を前提にしたものですから、海防と外交は、区別する必要があります。開国し外国との交渉が始まると、海防以上に重要なものとして、外国との交渉が出てきて、海防は二次的なものになり、名称も外国掛に変わるようになります。

——ペリーとの交渉の時の絵巻を見ると林が座っている。ところが、開港ということになると岩瀬忠震や永井尚志が出てきますね。「林はどうなったのか」という疑問が出てきます。

針谷 海防掛設置以前の時期でも、外国との交渉を考えると林は出て

きています。例えば、天保八年(一八三七)にアメリカの商船モリソン号が通商を求めて浦賀に来たときには、勘定奉行、大目付の評議だけでなく林大学頭にも諮問されています。外国との外交問題にまで立ち入って考えなければならぬときには、海防掛の域を超えてしまうのです。

——ペリー来航のときはどうなのですか。変化がおきるのですか。もっとも実力者であった林述齋が大学頭だった天保年間までと、それ以降の林家とでは林家を取り巻く状況も違い、一口では説明できないでしょうが。

上白石 弘化、嘉永期の海防掛という



上白石実氏

のは、大目付、目付、勘定奉行、勘定吟味役が任せられました。それと月番で廻ってくる海防掛老中と若年寄、この体制は、ペリー来航を迎えても変わりません。変わるののは、堀田正睦が出てきたころからです。

——ペリー来航時に外交の体制が変わらなかつたのは、どうしてですか。

上白石 弘化、嘉永期の海防掛に与えられた一番大きな問題は、異国船をどう取り扱うか、打払令を復活させるかどうかと、江戸湾の防備をどうするか

ということ。この二点は、海防であり、彼らで十分間にあった。ペリーと和親条約を結んだとしても、幕府の意識としては、薪水給与令の延長でしかなくて、外交をやるという意識はありませんでした。それが変わるののは、安政三年七月のハリスの着任からです。ハリスは総領事として、外交をやるために来日したとの認識を持っていました。ここから本格的な外交が始まることになりました。そうすると、今までの海防掛の体制では交渉を担当する人がいません。ペリーの時も同じ状況であったのですが、臨時の応接掛を任命し、対応した。それが嘉永六年(一八五三)に家督を継ぎ、大学頭となった林復齋だったのです。

——ハリス来日で幕府の体制は、どのように変化するのですか。

上白石 月番であった海防掛老中を専任とし、安政三年一〇月堀田正睦を外国御用取扱として、これにあてます。これで外国のトップが決まりましたが、堀田の下に来るべき、これまでの海防掛は、海防に関するだけで外交にまで手が及びません。そこで評定所、

大小目付、浦賀、箱館、下田、長崎という遠国奉行、林家、弘化年間から海防政策の立案に参画していた筒井正憲これに海防掛を加えたグループの諮問機関をつくります。私は彼らを「外交グループ」と呼んでいます。この中で話し合っている体制がいわゆる海防掛体制というものだと云えます。

——海防掛の次には外国奉行が登場し

てきますね。

上白石 ええ、安政五年六月に日米修好通商条約が締結されますが、その後安政の大獄があり、堀田が罷免されます。そして、七月に外国奉行が設置されます。今までは海防掛が「外交グループ」のリーダー的な存在で諮問をうけ、みんなで話し合っていて決めたのが、外交が始まったので、外交を専門にする人を決めなくてはならぬわけですね。特にトップに立つ人を決めなくてはならない、それが外国奉行です。

——最初の外国奉行は五人任命されましたね。

上白石 水野忠徳、井上清直、堀利熙、岩瀬忠震、永井尚志の五人です。ここで注目されるのが、他の奉行、特に下田奉行の井上、箱館奉行の堀が外交奉行を兼帯していることです。それから神奈川奉行が設置されると、外国奉行のうちから二名派遣されます。これは、外交の最先端にいた遠国奉行と外国奉行を兼ねることによって外国奉行を頂点とした体制の中で外交を全部やっってしまうということでした。

——この水野など五人は、外国奉行に任命される前は、それほど高い地位にいたわけではないようですが、彼らが幕府のなかで力を持つようになるのは、いつ頃からですか。

上白石 嘉永くらいからですね。阿部正弘によって海防掛目付に登用されます。さらに安政期になると、より発言力を強めます。

——弘化から嘉永の段階までは、「薪水給与令」の延長にあったとすれば、後に外国奉行にまでなっていくような人たちが、海防掛に取り立てられ、やがて外交の中心をになっていくのはなぜでしょうか。この頃、幕政の中で何が起きていたのでしょうか。

上白石 薪水給与をすることは、開国を前提にしていたのではなく、基本は鎖国であって、鎖国を守るための非戦のちよっとした譲歩であるという考え方です。和親条約にしても、あとで鎖国に戻すんだというつもりで結んでいます。しかし一方で、この時期は鎖国国是がどんどん崩れていって、腹の中では皆「もうそろそろ鎖国じゃないんだけど」と思いながら、口では「鎖国」を言わざるを得ない時期でもありました。

——幕閣のトップの方でも同じことなのでしょいか。

上白石 老中クラスでも胸のうちでは「鎖国はもう無理かもしれない」と思いますが、「打ち払い」と言わざるを得ない。「打ち払い」と言いながら審議を進めなければならなかった時期です。ですから、もうちよっと下の実務官僚レベルでは、もっと率直な表現として開国を推し進めていこうと言う層が育ってきていました。

——鎖国国是が崩れる風穴としては、「薪水給与」だけだったらそれほどはありませぬ。次に来るのが漂流民保護の問題であって、これは、国家間の問題となり得るので、ペリーも国交

開始交渉の生命線としています。その次は貿易ですね。下田での欠乏所貿易は、薪水給与の枠を超え、実質的な貿易になっていきますね。

針谷 欠乏所での品物のやり取りの状況は調べてみないとわかりませんが、打払いまでの「薪水給与」の時には、各藩とも見返りの品物の受取には、大変気を使っています。「要らないというのに無理やり受け取らされたのだ」などと言っています。

上白石 下田にハリスが来た頃から、さまざまな状況が変化しようです。また、外交の担当者もそれ以前とは変わってきます。たとえば、先ほど開港期になると、林家はどうなっていましたのかという話がありました。通商条約交渉以後は、従来、外国との交渉にあたっていた林家が消えてしまします。



ハリス
(黒船館所蔵の絵巻から)

針谷 通商条約ができたあとは、条約の書替えとか訂正しかないから、林家は一線に出て来なくなっただけですかね。——外国奉行と言う職ができれば、もう必要がなくなっただけということでしょうか。

針谷 新しい問題は、外国奉行が処理する形になりますから。——ところで、和親条約締結交渉の際

漢文と英文との訳をめぐって問題があったと聞いていますが、このことも林家が消えることと関係があるのでしょうか。

上白石 交渉の過程で英文と日本語で全然意味が違ってしまったことが原因だと思えます。つまり、総領事が置けるかどうかという重要な点で、問題が生じました。日本語では、日本とアメリカの双方が同意すれば総領事が置けるとなっていたのを、英文では、アメリカが望めば置けるとなっています。漢文の非常に言い回しの多い表現を間に入れることで、訳が狂ってしまい、漢文をささむ弊害が出てきました。推測ですが、林家の立場も悪くなったかもしれませんね。

——和親条約締結の時には「外交」という概念が熟しておらず、「和親条約締結は文書の授受であって、漢文で行われているから、林があつたのは適任であった」という意見もあります。しかし、通商条約になると通信的要素と、通商的要素が組合わり、外交の概念ができてくる。そうすると昌平齋の秀才で、下田奉行や箱館奉行も経験して、貿易実務にも明るい人間というのが外国奉行人選のポイントになるのではないのでしょうか。ところで、ハリスが来てからの喧嘩がぐくぐくの議論は、目付と勘定奉行のグループの問

だけであって、林の意見書はほとんど出てきませんね。

上白石 そうですね。この頃になると、林の考え方自体が古くなっていきます。

例えば、漂流民の取扱いなどについて、林は人生イデオロギーから見た意見を述べていて、これはモリソン号以来同様の路線です。その時期の実際の実務処理については、精神論議では役に立たなくなっているのは、覆いようがなくなっています。

——外交奉行が設置され、外交が始まると海防の問題はどうなるのでしょうか。

上白石 開国後も基本的には、海防を推し進めるという路線は変わりません。ただ、背面に押しやられてしまうのは、事実でしょうが。

針谷 文久期になると、軍政改革の問題が出てきます。外国御用取扱のほかに海防御備御掛というのが設けられます。単純な海防でなく、海軍の創設につながっていきます。

上白石 海防掛から外国奉行体制へという流れは、幕府が近代に向けての動きで自発的に変えていった流れですが外から与えられて変えていくというのが軍政改革です。この二つの流れの強さによって、幕末の幕府自身の考え方が出てくるのではないのでしょうか。

——大変興味深いお話を伺いましたが、機会を改め、次の段階の「軍政改革問題」もお話ししていただかなければなりませんね。長時間にわたり、ありがとうございました。

(二月二十七日横浜開港資料館にて。聞き手は館員の西川武臣、斎藤多喜夫があたりました。)

資料よもやまばなし

横浜ジャーナリスト列伝
佐藤虎次郎、その数奇な一生

佐藤虎次郎は、『横浜貿易新聞』に
対峙する存在であった『横浜新報』の
社長として、横浜の歴史に名をとどめ
る。彼は、元治元年(一八六四)六月
一五日、武蔵国児玉郡太駄村(現本庄
市)の茂木太平家の次男に生まれ、そ
の後かなり数奇な人生をおくった。本
稿では、彼の一生を追うことにより、
明治後期の横浜のジャーナリストたち
の実像に迫ってみたい。

茂木(後の佐藤)虎次郎はまず横浜
の地に姿を現す。土宜法竜宛南方書簡
に「原善三郎方の丁稚なり」(『南方
熊楠全集』七巻、一九七二)とあるか
ら、郷里の先輩原善三郎(児玉郡渡瀬
村出身)を頼って横浜に出てきたので
あろう。渋沢栄一の世話で原家に仕え
たともいう(笠井清『南方熊楠外伝』
一九八六)。

明治一七年(一八八四)八月、虎次
郎はアメリカへ渡航した。商人の知識
を研磨し商業の改良を計る目的で創設
された横浜研磨会は(虎次郎は同会会
員)、同月一五日、来栖壮兵衛・早川
覚兵衛県議、三沢進横浜商学校校長来
席のもとに送別会を開いた(『東京横
浜毎日新聞』明治一七年八月一七日)。
六年後の明治二三年、虎次郎はミシ
ガン大学を卒業し、法学士号を取得。
この滞米中、大学町アナーバーで南方

熊楠と親交を結ぶことになった。アナー

バーには当時三〇四〇名の日本人留学
生がいたという。虎次郎は「留学七年
中に、日本人として語るべきものはこ
のもののみ」と南方に高く評価された
(『南方熊楠全集』七巻)。南方の個
人発行になる『珍事評論』第一号(明
治二二年八月一七日)では、留学生各
人がフランス革命史の人物に对照され、
茂木はロベスピエールに模されている。
「熱心三昧正直一方革命中尤も力ある
人なり」、これがその人物評価であっ
た。『南方熊楠日記』第一巻(一九八
七)には、茂木たちが議論をたたくわ
し、酒を飲み、親密な交流を深める姿
が書きとめられている。

南方はまた、茂木や小沢正太郎ら
「在米民権家」たちと共に回覧新聞
『大日本』を発行した。その第一号
(明治二二年二月一日)には、大日本
社持主茂木虎次郎、編輯人堀尾権太郎、
主筆南方熊楠の名前が見える。

卒業後まもなく虎次郎は帰国した。
南方の日記によると、明治二三年六月
末頃までアナーバーにいたようで、一
二日の項には、帰国をひかえた茂木に
南方が数年來集めてきた書籍と植物標
品一箱を託したことが記されている。
ついで八月一五〜一六日、郷里(太
駄村・本庄村)で開かれた埼玉県政談

大演説会に、橋本義三や伊藤仁太郎ら
と共に自由党弁士として姿を見せる
(『時事新報』明治二三年八月一四日)。
後の社会主義者石川三四郎は、この頃
の虎次郎のことを「最も極端なる財産
平均論者であった」と述べているから、
米国帰りの急進的な青年だったのであ
ろう。石川は埼玉県児玉郡山王堂村の
出身。本庄小学校高等科を卒業後、父
に伴われて明治二三年九月上京し、麻
布我善坊町の茂木虎次郎・橋本義三
(『大日本』の同人、後の粕谷義三、
大正二二年衆議院議長 宅の玄関番と
して住み込んだ。一二月、茂木らが赤
坂新町へ転居した際にも同行している。
石川は、この両者から多大な影響を受
けた(入間市史編さん室寄託橋本清家
文書、北沢文武『学問と愛、そして反
逆』石川三四郎の生涯と思想
上』一九七四ほか)。

明治二三年一〇月、板垣ら土佐派が
立憲自由党機関紙『自由新聞』を発行。
茂木は保証金を上納し、発行人兼印刷
人兼理事(株主方)となった。その後
板垣派と国民自由党系の茂木たちとの
間に対立が生じ、翌年四月同社は分裂
(『時事新報』)。茂木は、初代衆議院
議長中島信行の仲介で、和歌山県東牟
婁郡古座川町高池の旧家佐藤長右衛門
家へ婿入りした。橋本もまた埼玉の粕
谷家の婿に入ることになった(新井勝
紘「南方熊楠の在米時代」『南方熊楠
百話』一九九一ほか)。

佐藤に改称後の虎次郎は、明治二五
年七月頃熊野の学校教師を辞し、再び

留学したようである。そして翌年一一
月、オーストラリアの木曜島へ渡航し、
真珠採取業の先駆者として知られるよ
うになる。佐藤商会と採貝艇を製造す
る造船所を営む傍ら、外相陸奥宗光よ
り豪州移民事業の調査を囑託されたら
しく(『武蔵国児玉郡誌』昭和一一、
『時事新報』)、『原敬関係文書』第
二巻には、明治二六〜二七年にかけて
ラジルやオーストラリアのタインズラ
ンドなどから外務省通商局長(兼移民
課長)原敬にあてた書簡が五通収録さ
れている。古座川町は移民が多く出た
所として知られる。

その後日本人排斥問題が起こり、佐
藤は母親の病気を理由に帰国した(『
南方熊楠日記』二巻、一九八七)。
三四年三月、横浜に滞在していた孫文
は、南方の紹介で虎次郎と二度にわた
り会談し時事を論じている。同じ頃、
虎次郎は横浜経済界で演説をおこなっ
ており、また「太平洋策」「対外政
策」などいくつもの著作を発表、横浜
で活躍を始めた。正木重之『群馬県政
史』(昭和一一)によれば西戸部町一
番地に居住していたという。

明治三四年一二月、虎次郎は日比野
重郎の『横浜毎夕新聞』(同年二月創
刊)の経営を引受け、翌年一月一日紙
名を『横浜新報』に改題、夕刊を朝刊
に改め、同紙を発展させた。資本は原
富太郎ら横浜の財界から出たという。
八月社屋を本町六丁目八六番地に新築
九月には太田町四丁目から移転、発行
部数の増加と共に横浜の有力新聞とな

った(『貿易新報』明治三十七年七月八日)。ちなみに『横浜新報』は明治三六年の衆議院選挙で島田三郎排斥の記事を連日掲載したが、原紙未発見のため詳細は不明である。

明治三十七年六月一日、同紙は『横浜貿易新聞』と合併、条例の手續上二〇日より三〇日まで『横浜新報』の紙名で発行された。号数は『横浜新報』のそれを引継ぎ、社屋は番地から類推して横浜新報社に置かれたと思われる。ところで、この合併の背景と佐藤の処遇については不明な部分が多い。同年五月から『横浜貿易新聞』の社長であった富田源太郎(もと小野光景秘書)が、日露戦争で購読数の減った同紙を建直すため、商況紙から一般紙への転換をはかり合併を進めたとも、赤字続きの『横浜新報』社長佐藤が合併を提案したためともいわれている。実権は富田社長が握った。佐藤は群馬県選出の衆議院議員になっていたから身を引いたのかもしれない。その後この新聞は、七月一日から『貿易新報』に改題され、明治三十九年二月三日には『横浜貿易新報』と紙名を変更した。



佐藤虎次郎

これ以後虎次郎は、ジャーナリストから政治家への道を歩む。原富太郎の

支援を背景に、明治三十六年三月第八回衆議院議員選挙に群馬県郡部から無所属で出馬、憲政本党の須藤嘉吉候補を破り初当選した。郷里の埼玉や横浜でなく群馬県から出馬した背景には、原善三郎(明治三十二年二月没)が群馬県多野郡選出の大地主郡会議員(明治二十九年八月)であり東武鉄道株式会社発起人の一人でもあったことなどが関係している。次の明治三十七年三月第九回の総選挙では、郡部第三位で当選、三八年立憲政友会入りし、四一年五月第一〇回総選挙には三選を果たした(手島仁「日糖事件と群馬県郡部衆議院議員補欠選挙」『群馬県史研究』三五号、一九九二)。

しかし明治四二年四月、日糖事件が発覚。佐藤はこれに連座し、七月議員資格を失った。日糖事件とは、経営不振に陥っていた大日本製糖株式会社(辰税法・官営法案成立のため各派代議士を買収し、二十一名の代議士らが収賄容疑で逮捕された疑獄事件のことである。佐藤は、三千円をもらい栗原亮一や横井時雄らと共に起訴、東京地方裁判所第一審で、重禁錮四月追徴金三千円(他の被告四名と共に)の判決を受け、衆議院の議席を失うことになった。その後控訴し第二審では無罪となっている(手島仁前掲論文)。

後日談であるが、この佐藤の補欠選挙に政友会は、日本銀行理事、大阪市長、韓国統監府総務長官をつとめた大物政治家鶴原定吉を輸入候補として擁立した。結果は予想に反し政友会の大

敗退。星野長太郎らが推す地元候補中島祐八が勝利した。

佐藤はこの後もう一度、明治四五年五月の第一回衆議院選挙に横浜市から立候補している。『原敬日記』第三巻には、この前年の三月、原敬が佐藤の立候補内定のため原富太郎から三之谷の別荘に招待されたという記述がある。結果は落選、佐藤はその後二度と国政に参画することはなかった。

政界から引退後の佐藤は朝鮮に渡り事業を起こそうとしたらしい。その姿は『原三溪翁伝』第一篇(未定稿)に記されているので、紹介しておこう。

原富太郎は、朝鮮の地価高騰を期待して土地買収を試み、先代原善三郎につかえ三溪の知遇を得ていた虎次郎に、仕事をさせる考えをもったという。原は実際には朝鮮の土地を踏まず、もっぱら佐藤との手紙のやり取りで事業を進めた。

まず原は朝鮮人禹玉所有の京城郊外の土地を買収し、大正元年四月一日、中村房次郎・市原盛宏・佐藤虎次郎と共に匿名組合を組織、京城府吉野町、三坂通等に宅地七千五百坪・同地上家屋、それに京畿道坡州郡金村に農地一三万坪を所有し、土地家屋及び農事経営に着手した。

大正三年六月一日、原合名会社を母体に原拓殖部を京城府に設け、京城府外狎鷗亭里(旧朴永孝別荘所在地)、盤浦里付近の農地一三万坪、京城府内三坂通普光里、梨奉院里、氷庫里方面南山門外より漢江にいたる景勝地帯を

あわせ約一五万坪を所有。農地、果樹の経営に着手した。

大正七年四月二二日には、匿名組合と原拓殖部を買収し、資本金三〇万円の朝鮮農林株式会社を創立する。重役には、取締役社長に西郷健雄、取締役佐藤虎次郎外三名、監査役に中村房次郎・原善一郎が就任した。本社は京城におき、住宅地経営は京城府・仁川府内及び近郊、山林経営は全羅南道長興郡・慶尚北道青松郡、農林経営は全羅南道長興郡を中心に展開した。

大正一〇年九月、会社は中村房次郎の持株を譲受け原家単独経営に。昭和一〇年、慶尚北道に五千町歩の山林を買収、全羅南道では山林二千五百町歩を取得、昭和一八年末には経営住宅地二〇万坪、農地は七万坪に達した。

佐藤はそこかたわら、朝鮮での教育などにたずさわる。大正八年八月私立芝山学校長に就任。一〇年八月には京城都市計画研究会を起し常任理事となった。一三年四月同民会を起し常任理事に、ついで副会長に就任。一五年には芝山普通学校長となったが(『武蔵国児玉郡誌』)、四月に宗学先から受けた傷がもとで、昭和三年九月六日、六四才でその波瀾に富んだ生涯を閉じた。朝鮮総督齋藤実に間違われて襲撃されたという(笠井清前掲書)。以上佐藤の一生を追ってみた。『横浜新報』が発見されず、また彼の著作もなかなか入手出来ぬ現在、佐藤虎次郎の思想等を分析することは困難である。今後の課題としたい。(吉良芳恵)

横浜新風土記稿

17

居留地の中国人印刷製本文具店

横浜に住んでいた中国人の職業と言え、中華料理店・理髪店・洋品店の所謂三把刀(刀を使う三つの職業)を想像する人が多い。ところが、居留地時代の横浜華僑は三把刀のみならず、様々な経済活動を含み、居留地社会の一端を支える存在であった。ここではそうした横浜華僑の多様な足跡の一つとして、中国人の印刷・製本・文具店を紹介したい。

ディレクトリーに見る印刷文具店

ディレクトリーという日本各地の居留地で営業・居住していた外国人の住所姓名録の中から、横浜の中国人の印刷製本文具店の記載をまとめたものが表1である。

一八六一年から一九二三年までのディレクトリーに、印刷店(Printer, Printing Office)、製本店(Bookbinder, Book Manufacturer)、文具店(Stationer, Stationery)として掲載された中国人商店は合計二店であった。中国人商店である否かは主に店名で判断した。ディレクトリーに記載のあった商店を年次の古い順に並べてみたのが表1である。店によっては、Wing Hingのように、何回か居留地内で移転したも

もある。移転のあいだ記載が中断した場合でも、店名が同じ場合は一つとして数えた。

ディレクトリーに最初に表れたのは一八六八年のChe ChingとLyn Singである。ともに八一番地で製本店を開いたが一年しか記載されていない。ただLyn Singについては一八六五年六月十七日号の『ジャパン・ヘラルド』(The Japan Herald)に広告が掲載されており、一〇六番で製本店を営んでいた。恐らくこれが中国人製本店の嚆矢であろう。ディレクトリーの次の記載は一八七〇年に一六六番地にあったNam Singである。Nam Singは途中一六五番に移転するが、一八七三年から一八七四年を除いて、一八八〇年まで記載されている。図1はディレクトリーの記載を欠く期間、一八七四年五月二十五日号の『ジャパン・ガゼット』(The Japan Gazette)に載った同店の広告である。「BOOK-BINDER & RULER」と書かれているので、製本(BOOK-BINDER)と会簿簿などの表の作成(Ruler)を引き受けていたことがわかる。ディレクトリーの記載がなくなる明治一四年(一八八一)の『横浜商人録』では、Nam Singは「製本・界引師」となっ

N A M S I N G .

BOOK-BINDER & RULER.
No. 165, Yokohama, Japan.
Book-binding & Ruling done in the best Style.
Yokohama, 1st April, 1874. 6m.

図1 Nam Singの広告 (The Japan Gazette, 1874.5.25)

ている。

職名を見ると、初期の店はBook-binder(製本)と表記された店が多く、一八七〇年代後半以降になると、Book-binderとPrinter(印刷)とStationery(文具)が並記される店が大半となる。一軒も印刷と製本、そして文具(時には書籍)販売を行っていたことがわかる。また「Ruler」や「Account Book Manufacturer」と書かれている場合もある。

記載数を年次別に見ると、一八八四年までは一から二軒、一八八五年以降一八九九年までは三から四軒、一九〇〇年以降は五、六軒が増え、最も多い一九一三年には八軒の中国人の印刷製本文具店があったことがわかる。この年、山下町(元居留地)には合計一軒の印刷製本文具を扱う店があり、八軒の中国人商店以外は、日本人経営が二軒、英国人経営が一軒あるのみで

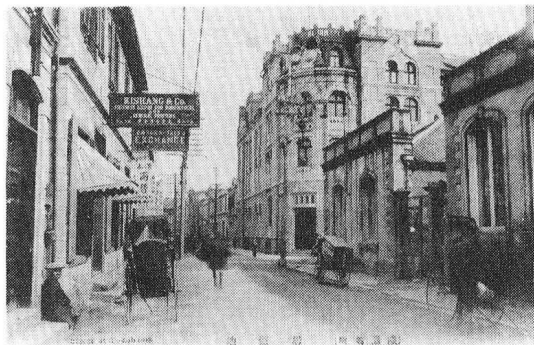


図2 52番付近の本町通り 左手に「KISHANG & Co.」の看板が見える

あった。一九二〇年以降は一九二三年までしか調査していないが減少傾向にあり、関東大震災以降激減したと思われる。当時、貿易商その他の中国人商店はいわゆる中華街地区に集まっているのに対して、印刷店の所在地は八一番と五二番や五三番といった本町通り沿いに多い点が興味深い。恐らく注文を寄せる相手が居留地内の西洋人であったため、本町通りに店を構えたほうが商売上有利であったためであろう。

図2の「横浜名所」居留地」と題された絵葉書には、五二番付近の本町通りが写されている。その画面左手の建物に「KISHANG & CO. Stationers, Account Book Manufacturers and General Printers 斯新合資会社」の看板が見える。二階建ての石造りの洋館である。同じ建物の隣には「Yuen-

表1 ディレクトリーに記載された中国人印刷製本文具店

| 商店名 | 職種 | 1870年 | 1875 | 1880 | 1885 | 1890 | 1895 | 1900 | 1905 | 1910 | 1915 | 1920 |
|---|-----|-------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 Che Ching | BR | (81) | | | | | | | | | | |
| 2 Lyn Sing | BR | (81) | | | | | | | | | | |
| 3 Nam Sing | BR | | | | | | | | | | | |
| 4 Wing Hing (Mercantile Printing co.) | BPS | (166) | (81) | (165) | | (157) | (52) | | (41) | | | |
| 5 Lee Shing | BS | | (183) | | | | | | | | | |
| 6 Wing Lee Shing | P | | | (157) | | | | | | | | |
| 7 Kingsell co. | BPS | | (53) | | | | | | | | | |
| 8 Wing Hong | B | | (81) | | | | | | | | | |
| 9 Tong Cheong | BPS | | (82) | | (55) | (52) | | (51) | | | | |
| 10 Chee San Brothers | BPS | | | | (60) | | | (156) | | | | |
| 11 Kun Lee & co. | BPS | | | | | | | | (52) | | | |
| 12 Sun Lee & co. | P | | | | | | | (123) | | | | |
| 13 Shang Lee & co. | BP | | | | | | | (52) | | | | |
| 14 Ki Shang & co. | BPS | | | | | | | | | (73) | | |
| 15 Wing Tai & co. | BPS | | | | | | | | (52) | | | |
| 16 Tong Hing | BPS | | | | | | | | (164) | (52) | | |
| 17 Ah Mang & co. | P | | | | | | | | (164) | (187) | | |
| 18 L. Chuk Son | S | | | | | | | | | (151) | | |
| 19 Kwong Lee | S | | | | | | | | | | (146) | |
| 20 L. Kishang | BPS | | | | | | | | | | | (81) |
| 21 Sung Cheong | P | | | | | | | | | | | (190) |

出典
 1868年~1869年=The Chronicle & Directory for China, Japan, & The Philippines
 1870年=同上およびThe Japan Herald Directory
 1871年=The Herald Directory
 1872年=The Japan Gazette Hong List and Directory
 1873年=The Chronicle & Directory for China, Japan, & The Philippines およびThe China Directory
 1874年=The China Directory
 1875年~1923年=The Japan Gazette Directory
 注
 (1) 括弧内の数字は店の所在地の地番
 (2) 職種略号は以下の通り。
 B=Bookbinder, R=Ruler, P=Printer, S=Stationer

中国人の印刷文具店は、ディレクトリーの記載年が短いものが大半だが、マーチャントイル・プリンテング商会は店名や所在地を変えながら、一八七二年から一九〇八年までの三六年間、横浜に店を構えていた。はじめ、一八七二年頃に八一番にWing Hing(漢字

Tai Exchange 源泰両替)店が見える。KISHANG & CO.はディレクトリーには一九〇五年から一九一九年まで五二番に記載され、一九二三年には二四番に記載され、文具販売と会計簿などの印刷業務一般を行っていた。店員構成を見ると、支配人のほか二、三人の中国人が働いていた。なお、一九一七年から一九一八年の間は、八一番地にも「L. Kishang, General Job Printer, Book-binders & Stationers」の記載が見られる。L. KishangはKISHANG & CO.の関係ははっきりとはわからないが、本店支店関係にあったのかも知れない。マーチャントイル・プリンテング商会(Mercantile Printing Co.)

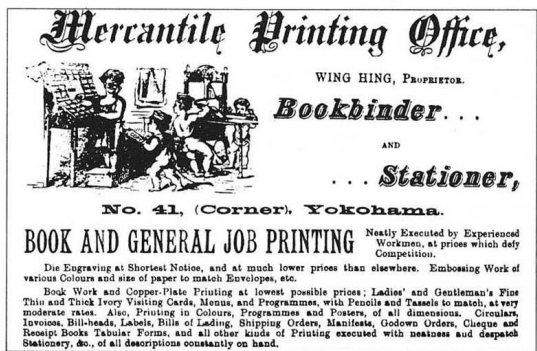


図3 マーチャントイル・プリンテング商会の広告 (The Japan Gazette Directory, 1902年)

では栄興)という製本店を開き、その後一八八一年には一五七番に同店の存在が認められるが、一八八五年に五二番に移ってから店名をマーチャントイル・プリンテング商会と改め、経営者としてWing Hingの名が見られる。一八九七年頃の同店ではWing Hingの他に二人の植字工と三人の印刷工、八人の製本師が働いていた。一八九九年に四一番に移り、一九〇八年までディレクトリーに記載されている。図3は一九〇二年版のディレクトリーに掲載されたマーチャントイル・プリンテング商会の広告である。ここから営業内容を見てみよう。同店では銅版印刷によって、パーティの招待状、メニュー、プログラムを作成し、それにふさ飾りを付けたり、封筒に模様の

透彫りを加える作業も行っていた。またポスターなどのカラー印刷や各種の回覧、インボイス、商標、積荷目録、船積指図書、領収書などの印刷をしていた。このようにマーチャント・プリンティング商会では、個人向けから業務用まで幅広い印刷業務を行っていた。また印刷・製本のかたわら、ペン、紙、墨、インクといった文房具の輸入と販売もつけていた。

文経文具店と致生印刷店

文経文具店の英語名は Kingsell & Co.、致生印刷店の英語名は Chee San Brothers である。文経文具店の経営者馮鏡如については拙稿「横浜人物小誌 横浜生まれの革命家 馮自由」(『開港のひろば』第三二号)でふれたが、香港から横浜居留地に進出してきた人物である。一八七八年頃居留地五番に文経文具店を開き、印刷及び製本業と文房具や雑貨の輸入・販売をてがけた。明治一四年の『横浜商人録』によれば、文経文具店には馮鏡如のほか、監督一名、植字工二名、印刷工一五名、製本師六名が働いていた。監督と植字工の一名は中国人で、もう一人の植字工(F. Place)は西洋人であろう。致生印刷店の店主馮紫珊(F. Chee San)は馮鏡如の弟である。馮紫珊は兄の店で監督として働き、一八八五年頃独立して居留地六〇番に致生印刷店(Chee Sang Brothers)を開いた。明治三二年(一八九八年)刊の『横浜姓名録』によれば、経営者の馮紫珊の下

で、植字工四人、印刷工六人、製本関係の職人が一〇人ほど働いていた。その後仕事が順調に伸びたのであろうか、一九〇五年のディレクトリーでは植字工・印刷工が三五人となっている。

致生印刷店は居留地の中で三回移転し、一九二三年の時点では五六番に所在していたが、馮紫珊自身は一九一七年頃広東に帰国し、関東大震災の惨状を見ずに、一九二一年その地で没した。

馮鏡如と馮紫珊は一八九五年孫文が横浜に亡命した際、彼の革命思想に共鳴し、文経文具店で興中会を設立した。

興中会は後に中国同盟会へと改組し、一九一一年の辛亥革命を推進した組織である。しかし、当時の横浜華僑の中で孫文ら革命派は少数であり、むしろ一八九九年に戊戌の政変により横浜へ亡命してきた康有為・梁啓超らの保皇派の思想を支持する者が多かった。馮鏡如と馮紫珊兄弟も次第に保皇派に傾斜して行った。馮鏡如は一八九八年の陰曆十一月に発刊された保皇党の機関誌『清議報』の発行兼編集人となった。清議報館はじめ、居留地一三九番に居を構えていた。その後旧居留地二五三番、山下町一五二番と移転をくりかえし、光緒二十七年一月二二日(一九〇一年一月二二日号)の第一〇〇号まで発行されている。

馮紫珊は横浜保皇党の会長となり、一九〇三年に発刊された『新民叢報』の編集兼発行人となっている。新民叢報社は初め山下町一五二番にあり、一九〇七年から一六〇番に移転し、光緒

三三年一〇月一五日の(一九〇七年一月二〇日)第九六号まで発行されている。『清議報』も『新民叢報』も内部に活版部を抱えていたが、機械や働き手といった技術と資本は、文経文具店と致生印刷店の支援を受けたものと考えられる。両誌の発行は、横浜華僑の資本・技術力と康有為・梁啓超ら亡命政客のもたらした新しい思想との出会いによって実現したものである。

英字新聞社での働き

これまで見てきたように、独立して印刷・製本店を営んだばかりでなく、中国人は居留地の英字新聞社で植字工や印刷工としても活躍した。

ジャパン・タイムズ社(The Japan Time Office)でも一八七〇年には五人の中国人が植字工として働き、ジャパン・ガゼット社(The Japan Gazette Office)では一八七〇年から七二年にかけてと、七五年から八〇年にかけて一、二名の中国人の植字工・機械技師・集金係が働いていた。またジャパン・ヘラルド社(The Japan Herald Office)では一八七〇年から一八七三年に数名の中国人従業員・植字工が働いていた。またジャパン・メール社(The Japan Mail Office)でも一八七二年から七八年までの間、数名の中国人が植字工・印刷工、機械技師として働いていた。

これらの中国人印刷工・植字工は、一八七〇年代に多く見られ、八〇年代以降はディレクトリーからは姿を消す。

その理由は何であろうか。開港以後横浜居留地には西洋人が多数訪れ、居留地の中で英字新聞をはじめとする印刷物が発行されるようになった。しかし、当時の日本人は西洋の近代印刷技術はもとより、英語のアルファベットさえ知らない状況であった。こうした状況にある横浜を新しい活躍の場としてやってきたのが中国人であった。彼らはイギリスの植民地となった香港や各地の租界で印刷技術や英語能力を身につけた。開港当初の横浜居留地では外国人の職探しが難しかったが印刷技術を身につけたものなら、誰でも口があったと『ジャパン・ガゼット』の発行に加わったバ・モスが懐古している。中国人は特に植字工として新聞社で働いている者が多い。印刷工は日本人の場合もあるが、活字を組む仕事は英語に慣れない日本人にはなかなか難しい仕事であったのだろう。やがて日本人が近代印刷技術や英語能力を身につけるにつれて、植字工・印刷工・機械技師としての中国人の優位性が減少していったのであろう。

なお、印刷業は広東人の得意とする職業といわれる。横浜で印刷店を開いた中国人についても、当時の広告から広東、香港出身者であったことが判る。今回は印刷業や製本業方面での中国人の活動をとり上げたが、今後も横浜で多種多様な経済活動を営んでいた中国人の足跡を掘り起こし、居留地に生きた彼らの存在の意義を考えていきたい。

(伊藤泉美)

横浜人物小誌

30

横浜幕府軍総司令官

窪田泉太郎

英仏駐屯軍を取り上げた前回の展示

「幕末の横浜山手——トワンテ山とフランス山」では、当時横浜で発刊されていた諸新聞から関係記事を拾い、その一部を展示した。また今年度刊行予定の英仏駐屯軍関係資料集でも詳しく紹介することになっているが、ここではその中から『ジャパン・タイムズ』The Japan Times 一八六六年六月三日号でその「失脚」がセンセーションナルに報道された神奈川奉行所役人、窪田泉太郎を取り上げてみたい。

同記事によると、窪田は横浜にいた幕府歩兵を率いて駐屯中の英陸軍第二〇連隊から訓練を受け、連隊の士官らほもちろんのこと、イギリス人をはじめとする居留民の間でもよく知られた人物であったらしい。その窪田が突然の蟄居を言い渡された。原因はフランスに軍事顧問団派遣を依頼するなどして陸軍をフランス式にすると約束した幕府が、一方でイギリス式訓練を受けているのは約束違反だとフランス側に非難されたため、窪田が責任をとらされたものであろうと述べている。その後、窪田の友人の話として窪田が処分を耐え切れず切腹を図ったこと、幸い友人らに止められて助かったが、その

ためにさらに打ち首という厳罰が下されることになった。とりなしによってなんとか命だけは助かったが、すでに狂人となってしまっており、今や生ける屍の状態にあると報じ、このような悲劇を引き起こしたフランスを暗に非難する言葉で記事は終わっている。

窪田に言及した他の記録には、ブラック著『ヤング・ジャパン』J.R.Black, Young Japan (一八八〇年刊)がある。同著には上記の『ジャパン・タイムズ』が取り上げた一八六六年の日英合同演習と、一八六四年一〇月二〇日に行われた初の日英合同阅兵式のように記述されており、いづれの時にも横浜幕府軍総司令官の任にあった「クボタ・セントロー」の名前がその見事な指揮ぶりとともに記されている。一八六四年以降、しばしば合同演習が行われたということから、窪田の名前とその勇姿は居留民の間で知られるようになったに違いない。また今回の展示で初めて紹介された英陸軍第二〇連隊の軍楽隊員デービスの手記にも窪田に言及した箇所があり、神奈川奉行支配定番役頭取締りの任にあった窪田が鎌倉事件で犯人捕縛に尽力したことから、窪田を「イギリス人の親友」と

まで言っている。ご存じワグマンも『ジャパン・パンチ』The Japan Punch 一八六六年「七」月号で窪田を描いている。「窪田泉太郎の幽霊、ブタ・サンタローの元にあらわれる」との説明文が見える。ブタ・サンタローと揶揄



『ジャパン・パンチ』1866年[7]月号

されているのは、親幕府政策を積極的にすすめていた駐日フランス公使ロッシュの片腕、カシオンである。イギリス人にとってはおそらく存在であり、『ジャパン・パンチ』でもしばしば槍玉にあがっている。これが『ジャパン・タイムズ』の窪田「失脚」記事を受けて描かれたものであることは間違いない。併せて掲載したのは当館所蔵古写真である。先年、当館職員がアメリカ議会図書館で、同館蔵ベアト写真帖の中に同じ写真を発見したが、それには「横浜幕府軍の司令官」との説明文があった。窪田であろうか。



窪田泉太郎か

さて記事は「失脚」と報じているが、事実はどうであったのだろうか。確かに慶応二年五月四日(一八六六年六月一日)、鉄炮玉薬奉行に転出してゐる。これは慶応二年五月七日の神奈川奉行支配定番役廃止に伴う配置転換であったが(『大日本近世史料 柳宮補任四・五・六』、『維新史料綱要』巻六)、窪田と英陸軍の関係を知る居留民、特にイギリス人の目にフランスの妨害と映ったとしても不思議はない。また幕府がイギリス側に陸軍伝習をフランスに依頼したことを正式に表明したのもちょうどこの頃(慶応二年五月一日)である(『維新史料綱要』巻六)。窪田の異動はこの動きと無関係ではなからう。

その後、窪田は記事とは異なり慶応三年一〇月一八日に歩兵頭並、続いて同年一二月、歩兵頭に昇進し、翌慶応四年正月三日、鳥羽・伏見の戦で戦死した(『勝海舟全集14 陸軍歴史4』講談社刊、長井實『自叙益田孝翁傳』)。本文を作成するにあたり、宮地正人先生(東京大学史料編纂所)と稲垣敏子氏に種々ご教示を賜った。末筆ながら厚くお礼申し上げます。

(中武香奈美)



『横浜開港資料館館報「開港のひろば」復刻版』(横浜開港資料館編・発行 平成四年三月 B五判 二九六頁 頒価一、二〇〇円)

当館は、昨年六月二日で開館満一〇年をむかえた。本書は、その記念事業の一つとして刊行されたものである。



▼展示

(1)『横浜開港への道―幕末の外交と遠国奉行』 4/29〜8/2 幕末という時代は、日本が国際社会の一員として歩み始めた時代であった。この激動の時代にあつて日本の外交と海防を支えた人々に幕府の「遠国奉行」たちがいた。展示では、長崎・新潟・浦賀・

「開港のひろば」は、当館の広報誌として一九八二年三月に創刊され、館の活動や催しを紹介して現在にいたっている。そのうち、創刊号から昨年六月発行の第三四号までを復刻した。第三四号には、総目次が付されている。号数を重ねるなかで、紙面構成や内容、頁立ては変化しているが、巻頭特集、座談、展示余話、資料よもやまばなし、横浜新風土記稿、横浜人物小誌など、毎号バラエティーに富んだ内容になっている。少し紹介したいと思う。

○巻頭特集

当館の収蔵資料や特別展示、企画展示の内容とその展示資料を紹介している。とりあげた資料としては、ブルーム・コレクションなどの個人コレクション、『イリュストラシオン』などの

下田・箱館・神奈川などに置かれた「遠国奉行」たちの活動を紹介する。

(2)『横浜、パノラマ図』(仮題) 8/5〜10月下旬 幕末開港期から明治・大正、関東大震災、昭和期に至る横浜の一覧図や全景写真を一堂に集め、横浜市街の変遷をたどる。

(3)『明治時代の横浜居留地』(仮題) 10月下旬〜1月下旬 明治三十二年に廃止されるまで横浜にあつた外国人居留地の変容、横浜・日本に与えた政治・社会・文化的影響を明らかにする。

(4)『二〇世紀初頭の横浜』(仮題) 2月上旬〜4月中旬 日露戦争後、日本の社会構造が激しく転換するなかでの横

欧字新聞、『関口日記』などの地方文書、そのほか黒船絵巻、瓦版、横浜浮世絵、絵葉書、彩色写真、F・ペートのアルバム、生糸商標、ジェラルド瓦、煉瓦などがあげられる。

○座談

初代遠山茂樹館長と当館の講演会、講座の講師、研究者、利用者をむかえての館長対談、また、それぞれの展示内容にちなんだ座談の模様がまとめられている。

○展示余話

展示がきっかけとなって、見学者から資料の寄贈・寄託を受けたり、情報が寄せられることもある。そういった報告や、展示の準備過程で出会った資料、開催後に明らかになった事実などが書かれている。

○資料よもやまばなし

浜の変化を、多角的に明らかにする。

▼講座

今年度も各種講座を計画しています。講師等詳細が決定しだい、「広報よこはま」にて申込み要領を發表します。

▼寄贈資料

- (1)西池家伝来資料 十四点(戸塚区矢部町 西池伸弥氏)
- (2)日露友好通商条約写本など 四点 横須賀村町名地割絵図 一点(南区南太田 増田好夫氏)
- (3)『横浜昔かたり』など 三点(港南区日野 大井健治氏)
- (4)『幻の国策会社東洋拓殖』など書籍 十三点(中郡二宮町 松尾健氏)

当館収蔵資料は、巻頭特集にもあげたように、バラエティーに富んでいる。これらの資料のなから、比較的まとまった事柄を選んで紹介したものを。

○横浜新風土記稿

このコーナーは、当館の普及誌『たまくす』から移されたもの。江戸時代の横浜の海沿いの村の生活、市街地の住民、根岸や本牧にあつた牧場、地域の製糸工場、小野光景の別荘であつた小野公園などをとりあげている。

○横浜人物小誌

写真家、建築家、翻訳屋、革命家など外国人を含む二八人の人物をとりあげている。なかには、原善三郎のような比較的知られている人物から、幕府歩兵隊長士喜太郎などの名前の知られていない人物も含まれている。(上田由美)

▼出版物

- (1)『横浜開港資料館所蔵 新聞・雑誌目録 平成二年一二月末現在』 価格 二、八〇〇円
 - (2)『横浜開港資料館所蔵 芝居番付目録』 価格 二、八〇〇円
 - (3)横浜開港資料館館報「開港のひろば」復刻版 一 価格 一、二〇〇円
- ▼臨時休館と無料入館のお知らせ
- (1)5月12日(火) 館内燻蒸のため全面休館します。
 - (2)6月30日(火) 7月3日(金) 資料整理のため閲覧室を休みます。
 - (3)6月2日(火) 横浜開港記念日につき展示室への入館は、無料となります。